

第144回 お色気ソングを仕掛けた 演歌界の大御所の思い入れ

浜口庫之助の門下生だった女性三人のコーラスグループ、スリー・キヤッツが歌った『黄色いさくらんぼ』は、昭和34年8月に封切られた松竹映画『体当りすれすれ娘』の主題歌として作られたものでした。紅白歌合戦に3度出場したほど歌手として著名だった浜口が、作曲家に転向してようやく放った初ヒット曲であり、コンビを組んだ作詞家・星野哲郎にとっても、島倉千代子の『思い出さん今日は』に次ぐうれいしいヒットになった作品です。

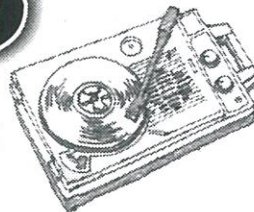
映画『体当りすれすれ娘』は、劇中に設定された九條映子（のちの寺山修司夫人）、有沢正子、中圭子の美人女優で構成される「ザ・スリー・キヤッツ」という名のコーラスグループを描いたコメディータッチの作品で、レコードに吹き込んだ浜口門下生の3人は女優さんたちの歌唱部分のアテレコを行ない、映画公開後に「スリー・キヤッツ」を名乗って自らの持ち歌にした、というしだい

『黄色いさくらんぼ』のシングル盤ジャケットには、バーレスク風の衣装でギター・ストッキングに覆われ

名曲カルテ

昭和歌謡と いままで

堀井六郎
絵 松本浦



た脚線美を披露している主演女優さんたちの写真がメインで写っていて、浜口門下生3人はモノクロ写真が右下方に掲載という程度の扱いでしたが、ヒット直後に出した8曲入り25センチLP『スリー・キヤッツのセクシー・ムード』のジャケットでは、スリット入りのロングスカートで大人のお色気をアピールしています。

それから11年後の昭和45年8月、メンバー全員がハーフであることを標榜したゴールデン・ハーフが、『黄色いサクラんぼ』でデビューします。当時は、「ポルノグラフィター」という外来語が普及中で、男性向け雑誌にはカラーで洋書ポルノの表紙などが掲載、そうした背景もあって、それまでのお座敷ソング中心だったお色気歌謡の輪が広がります。『経験』の辺見マリを筆頭に、エミー・マーガレットや聖ミカ、ホーン・ユキ在籍のザ・シークリームなど、ハーフ



フ系の歌手やグループがお色気路線に加わり、桃色百花繚乱、翌々年の山本リンダ復活へと続いて行きます。ゴールデン・ハーフが登場した翌年、プッシュイズという4人組女性グループが『見えた見えたよ』（曲・山路進一）という曲でデビューしています。ドキリとさせるグループ名と曲名ですが、超ミニの装いで歌うのは、物干し台から女性が掲げた「来訪をうながす合図の青い布切れが見えた」という男のお話です。

作詞したのは、これも星野哲郎。家を建てる際に『黄色いさくらんぼ』のレコードを壁に塗り込んだというほど同曲に特別な思いがあったようで、同系の「男を惑わす妄想歌謡」を楽しみながら創作したのかもしれない。

星野は昭和39年に駄じゃれ満載の『自動車ショー歌』（曲・叶弦大）を小林旭に提供していますが、発売時「ここらで、一発シトロエン」とあった歌詞が猥褻感を催すとされたため、すぐに「ここらで止めてもいいコロナ」という、現在のコロナ禍社会にふさわしいような歌詞に差し替えています。演歌の大御所でありながら、庶民目線のお茶目さも持ち合わせていました。